

広島県立美術館

研究紀要

第29号

展覧会記録

「所蔵作品展第2期 サマーミュージアム 戦後80年 戦争と美術、美術と平和展」

..... 神内 有理 編 1

木村伊兵衛、再生するイメージ

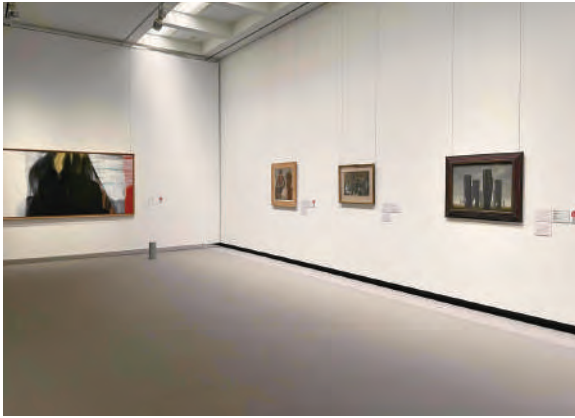
——『LIVING HIROSHIMA』のためのコンタクトプリントに関する試論

..... 山下 寿水 25

2 0 2 6



所蔵作品展第2期 サマーミュージアム 戦後80年 戦争と美術、美術と平和展より (第3室)



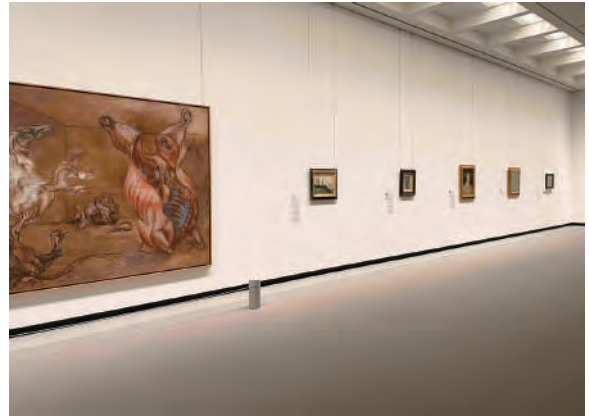
第1室



第1室



第2室



第2室



第3室



第4室



第4室



「縮景園と原爆」展示

展覧会記録 「所蔵作品展第2期 サマーミュージアム 戦後80年 戦争と美術、美術と平和展」

神内 有理 編¹

はじめに

広島県立美術館では、2025（令和7）年の所蔵作品展において、戦後80年を記念した「サマーミュージアム 戦後80年 戦争と美術、美術と平和」（2025年7月26日～10月5日）を行った²。所蔵作品展ではあったが、時節柄関心を集め、メディアに多く取り上げられる機会を得た³。また、SNS上や来館者アンケートでの熱心な感想、看視員からは時々展示室内で涙を流しておられる方がいらっしゃるとの報告も受けた。広島にある美術館の展示として、その歴史を重く受け止める方も多かったことだろう。

その中で、本展の記録として図録を求める声を受けたことから、本稿では本展の章解説・作品解説原稿に加筆する形で概要について記す。併せて、本展のために執筆した学芸員による新聞連載記事も付した。

なお、掲載する作品の所蔵は一部資料類を除き、全て当館である。

1. 本展の趣旨

美術館はしばしば、「非日常」的な場所だと言われる。確かに、静寂な空間で作品世界に引き込まれる感覚はその念を起こさせるのだろう。しかし、戦争ではその非日常のはずの美術館でさえあたりまえに破壊される。現に、1968（昭和43）年に設立された当館の場所には、かつて美術館—広島藩浅野家の私立美術館・観古館（浅野観古館）があったが、1945（昭和20）年に原爆で失われた。

美術は社会的あるいは政治的動向と無縁ではない。時代の価値観を先取り、あるいは体現し、時に激しく反発しながらその営みは行われ、作品にはそれぞれの時代を生きた作家の思索や想いが刻まれる。

本展は、第二次世界大戦期の欧米での芸術活動（第1章）、広島を中心とした戦前・戦中（第2章）、そして戦後に制作された作品（第3・4章）を通して、戦争と美術、美術と平和の関係を再考することを目的とした。また、当館が縮景園の一角に建てられたという場所性にも注目し、観古館のあった縮景園が原爆投下後に避難所・救護所となり、ここで多くの命が失われた歴史を紹介するコーナーも設けた。

本展が、今、展覧会を見るこの場所から、それぞれが過去を見つめ、未来を問う契機となることを願って。

2. 本展の内容

第1章 戦禍の西洋世界

第1章では、第二次世界大戦の渦中に制作された国外作家の作品を中心に紹介した。当館の西洋美

術作品は、収集方針「1920-30年代の美術」の元で集められている。両大戦間と呼ばれるこの時代はヨーロッパでは第一次世界大戦を経て混乱が続く中、社会不安を背景にファシズムが台頭し、第二次世界大戦を迎えた。世界規模に戦域が拡大したこの大戦は、総力戦として多くの国民が動員され、数千万人もの命が奪われ、芸術家も例外なく戦禍に巻き込まれた。

この時代、変容する時代状況に即した多様な美術活動がなされていた。例えば、イギリスの国家公認の戦争画家となったヘンリー・ムーア(1898-1986)の《ティルベリー・シェルター》は、ドイツ軍の空襲からの避難場所であった地下シェルターに避難する人々を描いたもの(1941年/図版1)。第二次世界大戦の際、ドイツ軍の空襲により、ロンドンでは約1万人の市民が亡くなった。ムーアは、避難場所である地下シェルターを取材し、300点以上の「シェルター・ドローイング」を手掛けた。本作は巨大な地下倉庫を訪れて制作されたもので、後景では保管されたロール紙と共に横たわる人々が描かれている。

パウル・クレー(1879-1940)は、ナチス政権樹立に伴い、作品は退廃芸術と見なされ、教職を追われた。ナチス党は、ドイツ民族の伝統を脅かすモダンアートを否定したことで知られる。ドイツの国公立美術館から油彩画約5,000点、版画・素描約12,000点を押収。1937年にミュンヘンで開催された退廃芸術展では、そのうち約650点が展示され、芸術家を弾劾し、その『退廃芸術展パンフレット』(1937年)⁴には罵詈雑言と共に作品が紹介された。

クレーの《バウハウス版 新ヨーロッパ版画集 第1集 内なる光に照らされた聖人》(1921年/図版2)は、その中の一つ。クレーがバウハウスの教職に就いて間もない頃の作品で、持物や衣服をあえて描かないことで精神的な強さが宿る身体を表現したという。しかし、退廃芸術展のパンフレット(個人蔵/図版3)では、人間の姿に見えないとまで酷評された。クレーは、その後、亡命先にて終戦を待たずに不遇のまま没した。

パブロ・ピカソ(1881-1973)の版画《フランコの夢と嘘》(1937年)は、1936年に起きたスペイン内戦に触発されて制作されたもの。左派の共和国人民戦線政府と、フランシスコ・フランコ総統を中心とした右派の反乱軍とがスペイン全土で争い、ピカソは苦境に立つ人民戦線政府を支援するために本作を制作した。フランコは滑稽でグロテスクな存在として描写されている。

空白となっていた(Ⅱ)の最後の4区画が埋められたのは1937年6月7日。ドイツ空軍による無差別爆



(図版1) ヘンリー・ムーア《ティルベリー・シェルター》1941年



(図版2) パウル・クレー《バウハウス版 新ヨーロッパ版画集 第1集 内なる光に照らされた聖人》1921年



(図版3) 『退廃芸術展パンフレット』1937年、個人蔵

撃を題材とした大作《ゲルニカ》(1937年、ソフィア王妃芸術センター蔵)の完成直後に加筆されている。そこには、子どもの死を嘆く母親の姿などが激しい描線で表現されており、ピカソの強い怒り、罪のない人々の死を悼む悲痛な心情が表現されている。

アリスティード・マイヨール(1861-1944)の《ウェルギリウスの農耕歌》(1937-1944年(1950年刊行)／図版4)は、ローマの詩人ウェルギリウスの『農耕詩』の挿絵として制作されたもので、南仏バニユルスの農村風景に古代の神話世界を重ねた平和な情景が描かれている。しかし、この頃、マイヨールはモデルを務めたユダヤ人女性を逃がすため、ナチスお抱えの彫刻家に協力を依頼したという逸話が残る。一見、穏やかな作品に見えるが、戦時下の緊張関係の中で生み出されたものであった。



(図版4) アリスティード・マイヨール
《ウェルギリウスの農耕歌》1937-1944年(1950年刊行)

イサム・ノグチ(1904-1988)の《追想》(1944(1983-84年)は、若い頃に日本で学んだ指物の技術を取り入れた作。日系人であったイサム・ノグチは、日米の開戦に苦悩し、自主的に日系人の強制収容所に入ったものの、収容所ではスパイの疑いの目を向けられ苦悩した。戦後は日米の架け橋となることを望み、1951年の夏、建築家・丹下健三の招待により広島を訪問。広島で見た光景について「墓は全部ひっくり返され、すべてのものが倒壊していた」⁵と語るとともに、「何らかの形で自分自身の償いのしるしを添えたいと思った」⁶と考え、原爆死没者慰霊碑案を作成する。しかし、原爆を投下したアメリカ人であることを理由に却下されたと言われている。その後、平和大橋・西平和大橋の欄干のデザインを手掛けたが、戦中、戦後、それぞれの時代において日米の狭間で翻弄され続けた。

第2章 戦前・戦中という時代

本章では、日本へ舞台を移し、広島県を中心に昭和初期から終戦にいたる激動の時代において、多様に展開した美術表現の姿を紹介した。その一角では、戦前の広島市内で芸術活動の拠点となった施設、現在の原爆ドームでの活動に焦点を当て、「原爆ドームで展示されたことのある作品」を紹介するコーナーを設けた。

・美術館としての原爆ドーム

戦前の広島で多くの美術展覧会の会場となったのは、現在の原爆ドームだった。

原爆ドームは、もともとは広島県物産陳列館(1915年建設、1921年から広島県立商品陳列所、1933年から広島県産業奨励館)と呼ばれ、広島県の産業を紹介・振興するための施設として建てられた。そこでは、県内外の物産品の収集・陳列、商工業に関する調査や相談、取引の照会に関する書籍類の閲覧、図案調整等が行われた。

設計はチェコの建築家のヤン・レツル(1880-1925)。建築は、一部鉄骨を使用した煉瓦造の3階建て、正面中央部分は5階建ての階段室、その上に銅板の楕円形ドームを乗せた構造であり、壮麗な洋風の建物はたちまちにして広島名所の1つとなった。

建物の1階は主に事務関係、2階は県内物産等の常設の陳列所、3階が催事場として用いられ、美術展もそこで開催された。2階・3階の面積は各1,000㎡あり、これはちょうど当館の地階県民ギャラリーのサイズに相当する。瓦解した現在の姿からは想像しがたいが、西日本でも最大規模の当館のワンフロアと同サイズであるという事実は、過去を自らに引き寄せて理解するための糸口となるだろう。

同館では、原爆投下によって焼失するまでの約30年間の間に、県内最大規模の公募展である広島県美術協会展覧会（以下、県美展）や広島美術史上で重要な芸州美術協会展等、120を超える美術展覧会や関連イベントが行われ（年表参照）、都市の活気を反映するかのようになぎやかな芸術活動が展開されていた（図版5・6）。

南薫造（1883-1950）《元安川》（図版7）は、元安川のほとりに建つ広島県物産陳列館を描く。ドームの色が銅板の赤褐色であることから、建築からあまり時を経ていない時期に描かれたと考えられている。本作を元にした絵ハガキも残されており、広島県物産陳列館が当時の広島を代表する名所であったことを伝える。

また、南薫造の個展ポスターの下絵（個人蔵／図版8）は、1935（昭和10）年の広島県産業奨励館での個展に際して作られたもの。草花をあしらった愛らしいデザインに、当時の文化の華やきが感じられる。

神田周三（1894-1972）《花売りの母子》（図版9）は、1931（昭和6）年の第12回帝展出品作で、翌年、広島県商品陳列所で開催された第17回県美展に出品された。昭和の初期には、広島出身・在住の画家が帝展などの全国規模の公募展に入選を果たすと、その作品が翌年の県美展に無鑑査出品されることがあった。

油彩画を思わせる重厚な絵肌やところどころに見られる



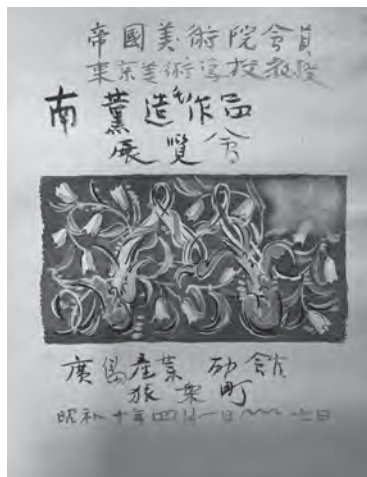
（図版5）昭和初期に行われた朝光会油絵展
（『新修広島市史第4巻』1958年より）



（図版6）第13回広島県美術展覧会の様子
（1928年）



（図版7）南薫造《元安川》制作年不詳



（図版8）南薫造《個展用ポスター下絵》
1935年、個人蔵



（図版9）神田周三《里の花売りの母子》
1931年

キュビズム的な多視点構図が特徴的な丸木位里（1901-1995）《池》（図版10）は、1936（昭和11）年の第8回青龍社展に出品された後、同年、広島県産業奨励館で開催された芸州美術協会展に展示された。同展は東京で活躍する広島出身の日本画家・丸木位里、船田玉樹（1912-1991）、洋画家・鬯光（1907-1946）らを支援するために雑誌『実現』を主催した佐伯卓造（1882-1976）らの尽力によって開催されたもので、画家たちにとって画業の転機の一つとなり、また戦前の広島文化を象徴する展覧会としても知られている。



（図版10）丸木位里《池》1936年

この展覧会に関連した『実現』誌上座談会で位里は、「（翌年の会場も）産業奨励館に定つて居るんだ。仲々ええ会場だよ」⁷と楽し気に語る。しかし、同展は翌年、「時局を鑑みて」行われず、代わりに傷病将兵士慰問献画展覧会が開催された。この年の7月に盧溝橋事件が勃発し、中国との全面戦争が開始されたことによる影響だろう。

産業奨励館では、1940（昭和15）年に聖戦美術展が開催されて以降、戦時色を帯びた展覧会が主となり、その三年後、聖戦美術傑作展を最後に展覧会事業は終了する。中学生であった平山郁夫（1930-2009）が、一度だけ訪ねた同館で藤田嗣治、宮本三郎らの作品を観覧したと語るの⁸、これら戦争画の展覧会だったのである。

その後、産業奨励館は、1944（昭和19）年3月に館業務を廃止し、内務省中国四国土木出張所や広島県地方木材株式会社として利用され、原爆投下の日を迎えた。

位里は、親しみを覚えていた会場だったが故に、終戦から5年後、《原爆の図》の展示のために帰郷した際、「見まい、思い出すまい。思い出すのはたまらない。見まいとしても見なければならぬ陳列館跡。わたしはこの陳列館をどうしたらいいかと広島へ来たたびに考えさせられている⁹。」とイラスト付きで産業奨励館を失った心境を語る。これは位里だけでなく、同館で展示を行った多くの広島¹⁰の芸術家に共通する思いだったのである。

・戦時下の美術

大正後期から昭和初期は全国的にヨーロッパのモダンアートの影響が広がり、さらには前衛芸術の登場やプロレタリア美術の振興により多様な美術運動が展開された時代だった。しかし、1937（昭和12）年に盧溝橋事件に端を発する日中戦争が勃発、翌年に国家総動員法が成立すると、やがて美術も戦時体制に組み込まれていく。

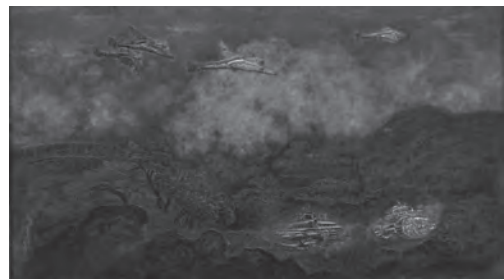
1934（昭和9）年に描かれた児玉希望（1898-1971）《黎明》（1934年／図版11）はのちに本人が語る¹¹ところによれば鷲は海外進出を目指す当時の日本をイメージしたモチーフだという。実物にも増して大きく捉えられた鷲の姿、恐らくは前年の満州事変に対する社会の空気を捉えたとも考えられ



（図版11）児玉希望《黎明》1934年

よう。

紀元二千六百年奉祝美術展覧会に出品された六角紫水(1867-1950)の《漆画爆撃行(アルマイト応用研究作)》(1940年/図版12)は、戦闘機や戦車をモチーフとした異色作で、戦時下にあった当時の時代相を映している。直接的な表現であっただけに、当時の批評では批判もあった。しかし作者は、「この作品は我らの過程用具たる理研研究の「アルマイト」が漆の浸透力強大なるのみならず其近来の進歩は完全に金銀の発色が発顕せらるゝに依り我研究の楽浪漆器の結付此に飛行機と戦車とに之を応用して新漆技を試み聊奉祝の意ニ依り茲ニ初めて発表して批評の一謁となさんとするもの也」とその意図を語る。アルマイトとは、財団法人理化学研究所が開発したアルミニウム表面に陽極酸化皮膜を作る表面処理のことで、漆の浸透力が高く、かつ金色や銀色への発色加工が可能な当時の新素材であるため、物資統制の中で、これを貴金属の代用品としても有意義だと考えられていた。



(図版12) 六角紫水《漆画爆撃行(アルマイト応用研究作)》1940年

紫水に学び、後に文部省無形文化財保護の選定を受けた漆芸家・河面冬山(1882-1955)の《大楠公像乾漆額》(1944-45年)は、戦中、恩賜財団軍人援護会の委嘱により、特攻隊遺族に贈るために作られた記念品(原作:北村西望)。忠君愛国の象徴・楠木正成(大楠公)は、当時の日本画でも盛んに描かれたが、ここでは戦没者への畏敬と慰霊にふさわしいと考えられたのだろう。脱活乾漆法(型に麻布を漆で貼り重ね、型から抜く技法)を用いた金属的な彩色が、戦時下における金属代用品としての乾漆の役割をも物語る。

このような国威発揚、彩管報国(絵筆(彩管)で国に報いる)のスローガンのもとで時局を反映した作品が作られた一方、次第に自由な表現は抑圧され、画材などは配給制となり、国家による統制・弾圧は押し進められる。



(図版13) 井上長三郎《屠殺場》1936年

井上長三郎(1906-1995)の《屠殺場》(図版13)は、1936(昭和11)年の第6回独立展出品作。閉鎖された空間の中、すでに肉塊となった動物とその横で慄く白い馬が描かれた本作は時代の閉塞感を如実に伝える。展覧会の直前に2.26事件が勃発したため、直後の展覧会への出品に際し、作品名を変え、撮影・印刷を禁止することを条件ようやく発表が許可された。社会不安が広がるなか、自由な表現の抑圧がすでに始まっていたことが伝わる。

そのような時代の下、ある画家たちの表現は自らの内面へと向かう。鬚光(1907-1946)は出征を前に三枚の自画像を描いた。その一枚である《帽子をかむる自画像》(1943年/図版14)は、やや荒削りともいえる銜のない描写により、自己という現実の存在を力強く描き出した本作は、「生きていく」ことの意味と、「生きている」存在の尊さを改めて見つめ直す心境に画家が達したことを物語る。



(図版14) 鬚光《帽子をかむる自画像》1943年

他方で、日本の大陸進出や戦線拡大に伴って、新たなモチーフとして中国や朝鮮半島などの風景や人々が描かれるようになったのもこの時代だった。

《屠殺場》と同じく第6回独立展出品された鈴木保徳（1891-1974）の《狼の檻を見る婦人たち》（1936年／図版15）は、中国東北部に取材したと伝わる作品。檻の中の狼を遠巻きに見つめる女性たち。狼と人の対立や、興味や不安、恐れといった様々な感情が渦巻く濃密な空間を、力強い輪郭線と大胆な陰影表現が生む劇的な印象を活かして描いている。



(図版15) 鈴木保徳《狼の檻を見る婦人たち》1936年

1942（昭和17）年の第29回二科展に出品された岡田謙三（1902-1982）の《北市場》（1942年／図版16）は同年春に訪れた、現在の中国、遼寧省・瀋陽（旧・満州国奉天市）の市場に取材したもの。様々なものが空間を埋める密度の高い画面でありながら、市場らしい活気に乏しいのは、体を休める無表情な前景の二人のせいだろうか。



(図版16) 岡田謙三《北市場》1942年

台湾、朝鮮半島、満州等の異国の文化や風俗は新たなモチーフとして画家たちの関心を捉え、多くの作品が制作された。しかし、その背景には日本よる植民地支配という政治的背景をもつことにも改めて目を向ける必要はあるだろう。

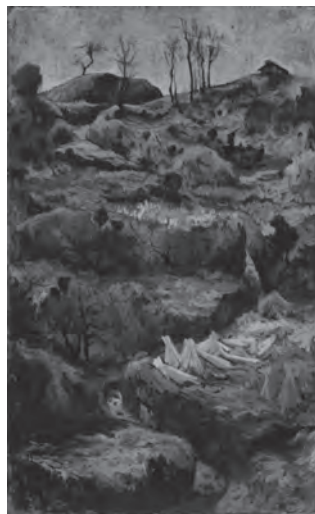
第3章 原爆の記憶

1945（昭和20）年8月6日午前8時15分、広島市に実戦において人類史上初めての原子爆弾が、8月9日午前11時2分には長崎市に2発目が投下された。爆風、熱線、放射線により両市街地は壊滅し、この年の年末までに広島市ではおよそ14万人、長崎市ではおよそ7万4千人が亡くなったといわれる。

この無差別、未曾有の暴力によって、画家たちも命を落とす。独立美術展で活動していた広島出身の洋画家・岩岡貞美（1913-1945）（図版17）は、1945（昭和20）年に陸軍伍長として西部第二部隊に応召し、8月6日、32歳で被爆死。東京美術学校油画科で南薫造に学んだ手島守之輔（1914-1945）（図版18）は、広島第二部隊に入隊し、8月6日に被爆。その10日後、31歳で亡くなった。

生き残った画家のある者たちは、被爆直後に、あるいは長い時間を経て原爆を主題とする作品を描いた。

戦前から広島洋画壇をリードした福井芳郎（1912-1974）は、衛生兵として公務中に被爆。倒壊した建物から這い出して爆心地に向かうも熱と炎で爆心



(図版17) 岩岡貞美《耕丘》1944年



(図版18) 手島守之輔《ゆかたの少女》1938年

地に近づくことが出来なかったが、その燃え盛る広島市街をスケッチした《昭和20年8月6日午前9時 福島町》(広島平和記念資料館蔵)を残した。《ヒロシマ》(1947~1948年頃/図版19)は、福井がヒロシマを描いた最初の作と伝わる。その後、福井は被爆直後に爆心地付近で目撃したむごたらしい遺体を直接的に描いた《炸裂後15分》(1945-52、広島平和記念資料館蔵)等を描き、〈自由な創造〉よりも〈伝える使命〉を制作の軸として「原爆画家」となった。

原爆投下時は呉市内にいた版画家・朝井清(1901-1968)は、爆心地付近で行方不明となった姉を探すため、翌日に入市。搜索で疲れ切った夕方、ふと顔を上げた空に美しさを感じ、一気に彫り上げたのが《広島の夕焼》(1945年/図版20)である。右側余白に「(軍都最後の日)朝井清」と書き込まれた本作は、1946(昭和21)年の日本版画協会展に出品され、進駐軍の情報統制に怯まず被爆地の情景を発表した気骨に賛嘆の声が寄せられたという。なお、その出品作はGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)の印刷・出版担当官として来日し、多くの日本人芸術家と交流をもったフランク・シャーマン(1917-1991)のコレクションに収蔵されている(だて歴史文化ミュージアム蔵)。

《被爆後風景》(制作年不詳/図版21)を描いた神田周三(1894-1972)は、爆心地から約2.5キロの己斐駅で被爆。倒壊した駅舎から必死で這い出すが避難の途中で黒い雨を浴び、戦後は10年に渡って後遺症で起き上がることさえ困難な体調が続いた。《被爆後風景》では、実際には瓦礫や遺体の散乱する凄惨な光景を、美しい色彩で力強い作品へと昇華している。神田は、1955(昭和30)年に一水会に《原爆死の行進》を発表し、以後原爆の絵を連続出品した。

大木茂(1899-1979)は爆心地から2.5キロの旭橋で被爆。1951(昭和26)年以来7回も入退院を繰り返し、その頃から原爆ドームをテーマにした《壁C・ドームの中》(1948年/図版22)をはじめとした「壁」の連作を手がけた。後に大木は「美しいものを描きたい、美しいものを追求すること自体が平和に通じる」と語った通り、穏やかな色調ながら作者の心情が感じられる画面となっている。二人はともに戦後、原爆の後遺症に長く苦しみながら、それぞれの方法で自らの体験や心情を描いた。

一方、中学生の時に爆心地から約6キロの広島陸軍兵器補給廠の材木置き場で被爆した平山郁夫は、避難する時に見た悲惨な記憶に



(図版19) 福井芳郎《ヒロシマ》1947-1948年



(図版20) 朝井清《広島の夕焼》1945年

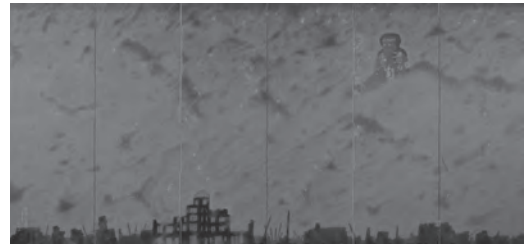


(図版21) 神田周三《被爆後風景》制作年不詳



(図版22) 大木茂《壁C・ドームの中》1948年

怯え、久しく広島市内に足を踏み入れることさえ出来なかった。原爆をテーマにした唯一の本画《広島生変図》(1979年／図版23)が描かれたのは、被爆から34年後のことだった。周囲からは、他の画家にはない体験として原爆の絵を描くことを勧められたが、「私自身の芸術と人生も、ある意味では戦争で死んでいった人々への供養である。広島で受けたもの、見たものを、自分の中で方向づけなければ、私は生きられなかった。」¹⁰と語る程、自らの生と主題は密接に結びついていた。



(図版23) 平山郁夫《広島生変図》1979年

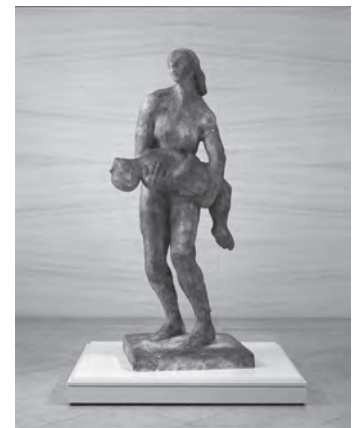
原爆をテーマにした作品として最もよく知られるのは、丸木位里・俊が手掛けた「原爆の図」シリーズだろう。位里は、原爆投下後、数日以内に埼玉県から帰郷し、広島駅から実家のある三滝に戻る途中で、壊滅状態となった街、人を目撃する。位里本人や親族の体験等を元に描かれた「原爆の図」は、原爆ドームやキノコ雲など、原爆を象徴するものではなく、キノコ雲の下、人々の生死を描いた点でも特筆される。

白地をシルエットのように染め上げる漆黒の竹林が大きな弧を描く位里の《竹林》(1964年／図版24)は、本作の10年前に制作した「原爆の図」第7部《竹やぶ》(1954年、原爆の図丸木美術館蔵)に由来する。位里が実際に目撃した、爆風でしなった竹林の中に被爆した人々が逃れ亡くなったという前作のイメージを引き継ぎつつ、水墨表現の多様さ、新たな可能性を追求する画家の姿が浮かび上がる。東洋絵画において竹は、松や梅と並び不屈の精神の象徴とされる。本作では、原爆による死と、そこからの再生を竹によって象徴させているといえるだろう。



(図版24) 丸木位里《竹林》1964年

被爆体験は持たないものの、慰霊碑の制作という形で原爆の惨禍に向き合った彫刻家に芥川永(1915-1998)がいる。芥川の《教師と子供の碑》(1970年／図版25)は、平和記念公園内にある《原爆犠牲国民学校 教師と子どもの碑》の原型にあたる。比治山女子短期大学で教鞭をとったことが縁で、本作以降、《マルセル・ジュノー博士の碑》(1979年)や《ヒロシマの碑》(1982年)の原爆被災のモニュメントを手掛けることとなった。芥川は、「制作中いつも頭をはなれなかったことは、慰霊碑はできる、しかし死者は二度と再び生き返ってはくれない(中略)このことにまつわるさまざまな思いは、現実にはどれもみな粘土をいじって解決でき」¹¹ないと絶望したという。しかし、その真摯な姿勢は、自身の制作をさらに深く推し進める契機となった。



(図版25) 芥川永《教師と子どもの碑(石膏原型)》1970年

被爆体験の有無を問わず、人間の想像をはるかに超える惨禍を表現することの困難はいかばかりだっただろうか。彼らはその困難と真摯に対峙し、生きる意味を見つめ続けた。

被爆体験の有無を問わず、人間の想像をはるかに超える惨禍を表現することの困難はいかばかりだっただろうか。彼らはその困難と真摯に対峙し、生きる意味を見つめ続けた。

第4章 戦争と美術、美術と平和

広島・長崎への原爆投下は、人類が核兵器の破壊力を直接経験した出来事だった。そしてそれは、核という新たな脅威にさらされる時代の始まりでもあった。悲しいことに、今もなお、世界各地で戦争や紛争によって人々の生活は危機に瀕し、多くの生命が不本意に失われている。

本章では、前章に続いて主として原爆の惨禍を具象的に表現した時代の作品から、より時を経て表現自体が多様に変化してゆく時代の作品を辿った。

多くの画家が原爆を表現する理由は様々にある。原爆投下後も続く戦争が、制作の動機となったのが名井萬亀(1896-1976)である。被爆直後に東京から帰郷し、広島で負傷者を宇品港(広島市南区)に運んだ経験を持つ名井にとって、1954(昭和29)年3月1日、アメリカが太平洋のビキニ環礁で行った水爆実験による第五福竜丸事件は衝撃だった。人類がさらに強力な核兵器を作ろうとしている事実は、名井に人が心の底に抱える残虐性を再認識させた。以後、核兵器をはじめ、公害などさまざまな社会問題に目を向け、それを告発する作品を発表する。

第3回現代日本美術展に発表された《地獄の港》(1958年／図版26)は、自身の体験を元にした作品。「地獄の港」とは宇品港のことで、原爆投下後、臨時野戦病院が設けられた似島に向かうための負傷者が運ばれ、亡くなった場所だった。後年の《六根清浄》(1968年／図版27)は、命あるものや無いもの、様々存在があふれる大画面。人間の欲が生み出す悲劇を戯画的に描いた。

名井は語る。「ビキニの灰の一粒ずつをよけながら、その間から星の無数と月を見つけ、太陽を見出し、陽のあたる処が人間の住む所だと強く感じ、芸術は抵抗の上に発足し発展生成するんじゃあなからうか?」¹²。名井は描くことで原爆に抗い続けた。

一方で、凄惨な被爆体験をもつ芸術家が皆、原爆をテーマとした制作に取り組んだわけではない。被爆体験を抱えながらもそれをテーマにした作品を作らなかった作家ももちろん多い。

さらには、表現以前に語ることさえ時を要することもある。染織家・渡辺博子(1938-)は、戦後約80年を経た近年、自身の体験を語り始めた¹³。想像をはるかに超える惨劇に向き合い、作品化する困難は想像に余りある。

それでも、34年を経て《広島生変図》を描いた平山のように、時間の経過が表現を可能にする、あるいは時が流れたことが表現のための新たな動機になることがある。

デザイナーの片岡脩(1932-1997)は、は中学1年生の時に爆心地から800mにあった旧制広島一中(現国泰寺高)で被爆。木造校舎は一瞬にして瓦解し、その下敷きになりながらも奇跡的に助かる。しかし、校舎に埋もれた友人たちは亡くなり、火の手から逃げたプールでは、建物疎開の作業中に被爆した同級生たちで溢れかえっていたという。片岡の凄惨極まる体験は、子供たちの原爆体験手記をまとめた長田新編『原爆の子』(岩波書店、1951年)に詳述されている。同級生320名のうち、翌年に復学で



(図版26) 名井萬亀《地獄の港》1958年(第3章に展示)



(図版27) 名井萬亀《六根清浄》1968年

きたのはわずか19名だったことからその惨劇が想像される。さらに片岡は原爆で父と兄まで失った。

片岡は、被爆から40年の節目に40点から成るポスター《LOVE PEACE》(1985年)を発表する。銀地に「光」の一字を配した作品(図版28)や、「水ヲクダサイ」(図版29)等、当時の記憶が直接的な言葉で表されている。カラフルな色彩から、一見では原爆とは無縁の作品のようにさえ見える。般若心経を背景に、被爆の記憶から抽出した「閃」「灼」「炎」「焦」「生」の文字をあしらった作品(図版30)からは、閃光、灼熱、炎に逃げまどい、故郷は焦土となったが、それでも生きている、生きている使命を果たしたいという作者の強い思いが感じられる。

片岡は「8月6日の惨状は鮮明に記憶しているが、そこを乗り越えた表現の中で平和と愛を考えたい」と語る。この言葉は、大木茂の言葉とも通じる。ポップでカラフルな色彩を用いた作品が多いが、生き残ったものとして、どう生きるかを追求した上で選ばれた作風といえる。

宮川啓五(1927-2022)の《太田川》(2000年/図版31)は、広島市内を流れる太田川をモチーフに、戦前・戦中・戦後の広島を四季の移ろいとともに描く。作者は、爆心地から約3キロの大芝町(西区)で被爆。親族の救助のため市中心部へ入り、多くの惨状を目にした。戦後は被爆者に対する差別を恐れ、長く体験を秘したが、被爆50年を期に原爆をテーマとした制作に取り組む。原爆の被害を直接的に描くのではなく、それ以前の広島郷愁を含んだ美しい姿が描くことで、原爆に奪われたものを想起させる。広島歴史をテーマとしつつ、過去を現在と地続きのものとする視点は、時を経たからこそその表現の形として意義深い。

本作の20年後に作者は、黒焦げになって泥水をすすりながら亡くなった学徒動員の少女たちの姿を水墨で描いた。「これだけは描けない、描きたくないという思いと、今描いておかなくてはこの気持ちでずいぶん苦しみました。私の最後のあがきのようなものです」¹⁴と語り、「何のためにこの世に生まれ、死んでいくのか。平和も知らずに惨めな死に方をした子どもがたくさんいた。70



(図版28) 片岡 脩《LOVE PEACE》1985年



(図版29) 片岡 脩《LOVE PEACE》1985年



(図版30) 片岡 脩《LOVE PEACE》1985年



(図版31) 宮川啓五《太田川》2000年

年前の事実を知ってほしい」¹⁵との切なる動機を語った。自分が目撃した人の死を記録することで、無差別な暴力に抗おうとしたのである。

原爆というテーマをいつ、どのように描くかは様々でも、彼らに共通しているのは、この惨劇を二度と繰り返したくないという、平和を希求する強い意志と願いに他ならない。

だからこそ、彼らの作品には、時代や国境、人種や信条を越えて人々の想像力を揺さぶり、他者と苦しみを共有しようとする力が感じられるのではないだろうか。

おわりに

「戦争と美術、美術と平和」と題した本展は、美術が戦争と無縁ではいられないことを振り返らせると同時に、美術だからこそ語れる平和があることを私たちに伝える。

所蔵作品による展示であるため、時代を語るには限界もあった。しかし、それでも作家たちの様々な声、叫びを伝えることが出来たのは、広島的美術館として当館が培ってきた収集の賜物だと感じる。

「人は今を生きる。明日もまた、いまを生きる。さまざまな願いと思いをこめて、いまを生きる。今の心、思いがあるかぎり、人はみな平等に生命の価値を分かち合えると信じたい。」¹⁶ (片岡脩)

作家たちの人生へ想いを馳せ、彼らの作品が発するメッセージを受け止めることは、戦争に抗い続けるための私たちの責務だろう。

¹ 本稿は福田浩子、角田新、藤崎綾、神内有理、山下寿水、岡地智子が執筆した解説原稿を元に、神内がリライトし、まとめたものである。

² 本展概要

【タイトル】所蔵作品展第2期 サマーミュージアム 戦後80年 戦争と美術、美術と平和

【会期】2025年7月26日(土)～2025年10月5日(日)

【会場】広島県立美術館2階所蔵作品展展示室(第1～4室)

【主催】広島県立美術館

【関連イベント】

■リレートーク

日時：2025年8月8日(金)15:00～(各室10分程度)

場所：2階展示室

講師：藤崎綾(当館主任学芸員)、神内有理(当館主任学芸員)、山下寿水(当館主任学芸員)、岡地智子(当館主任学芸員)

■インスタライブ配信

①1章：2025年8月12日(火)17:00～ 講師：神内 有理、山下 寿水、角田 新(当館主任学芸員)

②2章：2025年8月26日(火)17:00～ 講師：藤崎綾、神内 有理(当館主任学芸員)

③3章：2025年9月 9日(火)17:00～ 講師：藤崎綾、神内 有理、角田 新(当館主任学芸員)

④4章：2025年9月30日(火)17:00～ 講師：角田 新、神内 有理、岡地 智子(当館主任学芸員)

■広島市現代美術館との連携インスタライブ配信

日時：2025年8月13日(水)17:00～

講師：松岡 剛(広島市現代美術館)、角田 新(当館学芸員)、藤崎綾(当館主任学芸員)、神内 有理(当館主任学芸員)

■対話によるギャラリートーク

日時：2025年9月21日(日)13:00～14:00

場所：2階展示室

講師：福田 浩子(当館学芸課長)、山下 寿水(当館主任学芸員)

■フリートークデー

日時：2025年8月17日(日)、9月21日(日)
9:00～17:00

【縮景園内慰霊碑での関連展示】

戦争の悲惨さを語り継ぐとともに、復興した現在の姿の尊さを感じてもらうことを目的として、縮景園の被爆当時の状況を描いた作品を閲覧できる。

閲覧方法：園内の慰霊碑横の掲示板に広島平和記念資料館が所蔵する「市民が描いた原爆の絵」の中から縮景園での体験を描いた作品につながるQRコードを掲示

【縮景園慰霊碑付近での被爆ピアノの演奏会】

演奏会日時：令和7年7月26日(土) 11時30分頃～
演奏場所：縮景園 慰霊碑前

³ 【新聞】

[朝日新聞]

・「美の殿堂 原爆ドームをたどる」(『朝日新聞』2025年9月13日)

[中国新聞]

- ・「戦前・戦中・戦後 記憶をたどる」(『中国新聞』2025年9月11日)
- ・山下寿水「戦争と美術、美術と平和①国策 芸術家の運命を左右」(『中国新聞』2025年9月19日)
- ・神内有理「戦争と美術、美術と平和②抑圧の違和感語る作品も」(『中国新聞』2025年9月20日)
- ・藤崎 綾「戦争と美術、美術と平和③破壊の爪痕 閉塞感漂う」(『中国新聞』2025年9月23日)
- ・角田 新「戦争と美術、美術と平和④原爆の記憶 絵馬に込め」(『中国新聞』2025年9月24日)

[毎日新聞]

- ・「惨禍の記憶 意味を問う」(『毎日新聞』2025年8月14日)
- ・山下寿水「戦争と美術、美術と平和①弾圧された前衛芸術家」(『毎日新聞』2025年8月17日)
- ・神内有理「戦争と美術、美術と平和②自由と抑圧 激動の時代」(『毎日新聞』2025年8月30日)
- ・藤崎 綾「戦争と美術、美術と平和③〈ドーム絵画〉に注目」(『毎日新聞』2025年9月4日)
- ・角田 新「戦争と美術、美術と平和④空気一変 ビキニの水爆実験」(『中国新聞』2025年9月6日)
- ・神内有理「戦争と美術、美術と平和⑤想像力揺さぶる原爆表現」(『毎日新聞』2025年9月13日)
- ・「いのちの糸 織り上げたい 染織作家・渡辺溥子さん被爆体験胸に」(『毎日新聞』2025年9月20日)

[読売新聞]

・「美術が伝えたかった戦争」(『読売新聞』2025年9月20日)

【テレビ】

[NHK広島]

・戦後80年原爆被害をテーマに描いた絵画など展示(2025年9月19日)

【雑誌】

- ・『婦人画報』8月号
- ・『美術の窓』9月号
- ・『美術年鑑』2026年版
- ・『リビング広島』8月29日号

⁴ 本稿の図版2・3は以下書籍からの転載。Ausstellungsführer "Entartete Kunst", Berlin: Verlag für Kultur und Wirtschaftswerbung, 1937(Köln: Verlag der Buchhandlung Walther König, 1988) .

⁵ Isamu Noguchi, interview with Dore Ashton, September 13, 1978, 62. The Noguchi Museum Archives, MS_WRI_047_005.

⁶ Isamu Noguchi, Isamu Noguchi: A Sculptor's World, New York: Harper & Row, 1968.

⁷ 「芸州美術協会同人座談会」(『実現』第179号、1937年6月)

⁸ 朝日新聞広島支局『原爆ドーム』(朝日新聞社、1998年)

⁹ 丸木位里「陳列館跡」(『中国新聞』1950年10月5日)

¹⁰ 平山郁夫『絵と心』(読売新聞社、1998年)

¹¹ 高木茂登「遠くの声―芥川永の彫刻」(『比治山大学短期大学部紀要』第38号、2003年)

¹² 『美術手帖』(第82号、1954年)

¹³ 福田浩子「渡辺溥子の染織世界を垣間見る」(『広島県立美術館研究紀要』第28号、2025年)

¹⁴ 「戦後70年 志の軌跡 番外編 被爆画家 記憶を描く 〈下〉 日本画家・宮川啓五さん」(『中国新聞』2015年8月3日)

¹⁵ 同上

¹⁶ 「【終戦の日】土田ヒロミ『ヒロシマ・コレクション』より、一部を特別公開 | NHK出版デジタルマガジン(nhk-book.co.jp)」(2026年2月16日閲覧)

＊広島県物産陳列館（原爆ドーム）で開催された美術展関係年表

西暦	和暦	開催期間	事項・展覧会など
1915年	大正4	4.5	広島県物産陳列館が完成
1916年	大正5	3.18	美術（絵画彫刻）展覧会委員会
1916年	大正5	4.6	美術展覧会委員会
1916年	大正5	5.15-30	第1回広島県美術展覧会
1916年	大正5	5.31	広島美術協会設立
1916年	大正5	6.13	広島美術協会規則起草委員会
1916年	大正5	6.20	広島美術協会創立委員会
1916年	大正5	12.17	広島県美術協会創立総会
1917年	大正6	2.13-15	美術工芸講習会
1917年	大正6	4.8	広島美術協会役員会
1917年	大正6	5.1-15	第2回広島県美術展覧会
1917年	大正6	6.16	美術協会懇親会
1918年	大正7	4.11	広島美術協会委員会
1918年	大正7	5.1-15	第3回広島県美術展覧会
1918年	大正7	5.4	美術工芸講演会
1918年	大正7	5.11	美術工芸講演会
1918年	大正7	10.△-△	工芸品展覧会
1918年	大正7	11.1-10	小品画展覧会
1919年	大正8	2.1	広島美術協会理事及び協議委員会
1919年	大正8	5.1-15	第4回広島県美術及び美術工芸品展覧会
1919年	大正8	6.28	広島美術協会総会
1920年	大正9	1.22	広島美術協会役員会及び出品協会常務員会
1920年	大正9	5.1-15	第5回広島県美術及美術工芸品展覧会
1920年	大正9	5.21-30	第1回児童自由書画展覧会
1921年	大正10	1	広島県立商品陳列所と改称
1921年	大正10	3.1-10	図案展覧会
1921年	大正10	5.1-15	第6回広島県美術及美術工芸品展覧会
1921年	大正10	5.18-27	第2回児童自由画書き方展覧会
1921年	大正10	8.28-29	欧州大戦に関するポスター展覧会
1921年	大正10	11.5-7	広島写真展覧会
1922年	大正11	5.1-15	第7回広島県美術及美術工芸品展覧会
1923年	大正12	3.1-△	芸備図案展覧会
1923年	大正12	5.1-15	第8回広島県美術及美術工芸品展覧会
1924年	大正13	5.1-15	第9回広島県美術及美術工芸品展覧会
1924年	大正13	10.3-7	日本画総合大展覧会
1925年	大正14	1.22	広島県美術協会総会
1925年	大正14	5.1-15	第10回広島県美術展覧会
1926年	大正15	3.1-7	第1回教員美術展
1926年	大正15	6.16-30	第11回広島県美術展覧会
1926年	大正15	10.27-11.3	ガンス社第1回展
1926年	大正15	11.5-11	広島美術院第1回展
1927年	昭和2	5.1-△	第12回広島県美術展覧会（出品番号39 田中頼璋《漁樵問答図》出品か）
1927年	昭和2	9.16-18	第1回京都市工芸品展覧会・京染宣伝展覧会
1927年	昭和2	9.21-25	第2回教員作品展
1927年	昭和2	11.1-7	広島美術院第2回展
1928年	昭和3	2.25-28	県下児童の絵画手工展
1928年	昭和3	3.1	広島県美術協会総会
1928年	昭和3	5.1-10	第13回広島県美術展覧会

西暦	和暦	開催期間	事項・展覧会など
1928年	昭和3	8.5-11	広島美術院主催洋画夏季講習会
1928年	昭和3	9.16-20	第3回教員作品展
1928年	昭和3	10.31-11.6	第3回広島美術院展覧会
1929年	昭和4	4.25-5.14	昭和美展(出品番号38 渡辺雲俣《金鱗玉藻》出品)
1929年	昭和4	9.22-29	第4回教員作品図画手工展
1929年	昭和4	11.1-7	広島美術院第4回展
1930年	昭和5	4.10-17	素人書画展覧会
1930年	昭和5	5.10-19	第15回広島県美術展覧会
1930年	昭和5	5.11・14・18	美術講演会
1930年	昭和5	11.10-16	広島美術院第5回展
1931年	昭和6	5.1-10	第16回広島県美術展覧会
1931年	昭和6	10.16-20	頼山陽遺品遺墨展覧会
1931年	昭和6	11.1-7	広島美術院展第6回展
1931年	昭和6	11.8-12	第5回教員作品展
1931年	昭和6	11.20-27	第1回広島県下工芸品展覧会
1932年	昭和7	2.9-15	第1回広美展
1932年	昭和7	4.15-24	第17回広島県美術展覧会(出品番号36 神田周三《里の花売りの母子》出品)
1932年	昭和7	6.5-7	河面冬山蒔絵作品展
1932年	昭和7	9.22-26	第6回広島県下教員作品展覧会
1932年	昭和7	11.20-26	第2回工芸品展覧会
1933年	昭和8	3.15-21	広島洋画協会第1回展覧会(出品番号35 檜山武夫《プラットフォーム》出品)
1933年	昭和8	5.1-10	第18回広島県美術展覧会
1933年	昭和8	9.22-26	第7回教員作品展
1933年	昭和8	10.13-17	清水登之・鈴木亜夫洋画展覧会
1933年	昭和8	10.23-29	広島洋画協会第2回展覧会
1933年	昭和8	11	広島県産業奨励館と改称
1933年	昭和8	11.24-27	清水登之広島風景並に肖像画展
1933年	昭和8	12.2-8	芸柱社主催第2回日本画展覧会
1934年	昭和9	4.28-5.7	第20回広島県美術展覧会
1934年	昭和9	5.9-13	独立美術協会第4回展
1934年	昭和9	10.15-21	第4回工芸展覧会
1934年	昭和9	11.26-12.2	広島洋画協会第3回展
1934年	昭和9	11.26-12.2	芸柱社第3回展
1935年	昭和10	3.9-15	広陵画院第1回展
1935年	昭和10	4.1-7	南薫造個展
1935年	昭和10	4.28-5.7	第21回広島県美術展覧会
1935年	昭和10	4.29	広島県美展改革陳情書提出
1935年	昭和10	5.12	広島県美術協会総会
1935年	昭和10	5.24-30	陶器展覧会
1935年	昭和10	9.18-24	広島洋画協会第4回展
1935年	昭和10	11.1-5	第5回広島県工芸展覧会
1935年	昭和10	11.19-12.1	中国写真美術展覧会
1936年	昭和11	2.27-3.4	広島蒼原会第2回水彩画展
1936年	昭和11	2.27-3.4	朝光会第3回展
1936年	昭和11	3.31-4.6	神田周三画塾展
1936年	昭和11	4.9-15	広島日本画院展覧会
1936年	昭和11	4.11-15	松下宗義個展
1936年	昭和11	5.7	協議の結果、県美展無期延期
1936年	昭和11	5.20-6.13	第2回広国造形美術展覧会
1936年	昭和11	6.6-8	光画研究会第1回展

西暦	和暦	開催期間	事項・展覧会など
1936年	昭和11	6.6-12	石鹸素地彫刻展覧会
1936年	昭和11	11.7-9	白彩会第1回展
1936年	昭和11	11.22-26	芸州美術協会第1回展 (出品番号40 丸木位里《池》出品)
1937年	昭和12	5.1-10	第23回広島県美術展覧会 (出品番号37 岡部繁夫《卓上静物》出品)
1937年	昭和12	6.25-29	更生第1回みづゑ(蒼原会)展
1937年	昭和12	10.23-24	傷病将兵士慰問献画展覧会
1938年	昭和13	5.2-10	第24回広島県美術展覧会
1938年	昭和13	7.2-4	福田恵一個展
1938年	昭和13	9.14-18	広島県小学教員図画展覧会
1938年	昭和13	11.1-5	第7回広島県工芸展
1939年	昭和14	3.8-12	朝光会第6回展
1939年	昭和14	4.29-5.8	第25回広島県美術展覧会
1939年	昭和14	8.8-14	東光会夏季洋画講習会
1939年	昭和14	11.2-5	小早川篤四郎従軍画会
1940年	昭和15	4.28-5.7	紀元二千六百年記念美術展
1940年	昭和15	5.△-△	フォルム美術協会第3回展
1940年	昭和15	10.25-11.7	聖戦美術展
1942年	昭和17	3.8-22	第2回聖戦美術傑作展
1942年	昭和17	5.1-10	第28回広島県美術展覧会
1943年	昭和18	5.1-10	第29回広島県美術展覧会
1943年	昭和18	5.27-30	軍艦献納画展覧会
1943年	昭和18	12.8-22	聖戦美術傑作展

※本展で展示している作品については太字で示した。

※△は不明の日にちを指す

※本年表は、出原均「ひろしま美術文化小史 I 広島県物産陳列館での展覧会」(『'92美術ひろしま』1992年3月)を主として、菊楽忍編「広島県物産陳列館年表」(『広島から広島』展図録、広島県立美術館、2010年)、出原均編「年譜」(『広島美術の系譜』展図録、広島市現代美術館、1991年)を参考に「美術」(絵画・工芸・彫刻)に関する展覧会・行事等を抜き出した。

『毎日新聞』連載原稿(計5回)

・「戦争と美術、美術と平和①弾圧された前衛芸術家」山下寿水(『毎日新聞』2025年8月17日)

第二次世界大戦の終戦から80年の節目。本展では、美術作品を通して戦前・戦後の広島を紹介しているが、その導入部においては、時代の概観を伝えるために、第二次世界大戦の渦中に制作された国外作家の絵画・彫刻などを紹介している。

数千万人もの命が奪われた第二次世界大戦では、各国ともに総力戦として多くの国民が動員され、芸術家も例外なく戦禍に巻き込まれている。例えば、英国を代表する彫刻家ヘンリー・ムーアは、国家公認の戦争画家として、地下シェルターに避難する人々の過酷な状況を描いた。

ドイツにおいては、ナチスによる政権掌握後、前衛的な作品は「退廃芸術」と見なされ、国公立の美術館などから没収され、芸術家も弾圧された。その代表的な画家であるパウル・クレーも130点余りの作品が没収され、亡命中に命を落とした。パブロ・ピカソはドイツ軍による祖国スペインへの爆撃に心を痛め、かの《ゲルニカ》を描いた。本展ではこの悲しみと怒りが表現された同時期の作品を展示している。

平和大橋・西平和大橋のデザインで知られるイサム・ノグチは、日系アメリカ人として日米開戦に心を痛め、戦時中には志願して日系人の強制収容所に入った。1951年には初めて広島を訪れ、実現こそしなかったものの原爆慰霊碑の設計に思いを込めた。

戦時下の芸術家たちがいかに生きて、いかに作品を残したのか、その様子的一端を本展冒頭では紹介している。ぜひこの機会にご覧ください。

図版：パウル・クレー「内なる光に照らされた聖人」(1921年、広島県立美術館所蔵)

・「戦争と美術、美術と平和②自由と抑圧 激動の時代」神内有理(『毎日新聞』2025年8月30日)

第2章は、昭和初期から終戦にいたる激動の時代に展開された多様な美術表現について紹介している。

その一角では、広島県物産陳列館(のちに広島県立商品陳列所、広島県産業奨励館に改称)、つまり現在の原爆ドームで展示された作品6点を展示している。県内産業の振興のために建てられた施設だったが、同時にそこは県内最大規模の展覧会であった広島県美術展や作家の個展等、多くの美術展を開催する会場として現在の美術館の役割も果たしていた。

広島県物産陳列館で展覧会が行われていた大正後期から昭和初期は全国的にも多様な美術運動が展開された時代であった。しかし、1937年に盧溝橋事件に端を発する日中戦争が勃発、翌年に国家総動員法が成立すると、やがて美術も戦時体制に組み込まれていく。

大陸に進出する当時の日本の氣勢を3羽の鷲によって表現した児玉希望「黎明」(34年)、戦闘機や戦車が大陸を進行する六角紫水「漆画爆撃行(アルマイト応用研究作)」(40年)等、国威発揚、彩管報国(絵筆(彩管)で国に報いる)のスローガンのもとで時局を反映した作品が作られた。さらに、次第に自由な表現は抑圧され、画材等は配給制となり、国家による統制・弾圧が押し進められた。

2.26事件の頃に描かれた井上長三郎《屠殺場》(36年)は、逃げ場のない空間を描くことで時代の閉塞感を切に伝える。

また、日本の大陸進出や戦線拡大に伴って、新たなモチーフとして中国や朝鮮半島などの風景や人々が描かれるようになったのもこの時代であった。

図版：井上長三郎「屠殺場」(1936年、広島県立美術館所蔵)

・「戦争と美術、美術と平和③〈ドーム絵画〉に注目」藤崎綾(『毎日新聞』2025年9月4日)

現在、核兵器の廃絶や恒久平和を求めるシンボルとなっている原爆ドームは、その呼称すらまだ定まらない終戦直後から、早くも画家たちによって絵画化されてきた。混乱のさなかに目を留めた情景を描いた作品もあれば、意識的にドームに取り組んだ作もあり、本展では、6人の作家のドームを主題とした作品が並ぶ。

呉市出身の版画家・朝井清は、原爆投下の翌日、爆心地近くに住む姉の消息を求めて広島市内に入った。捜し疲れて座り込んだ画家の目に映ったのは、崩れ落ちたドームを包む美しい夕焼け。帰宅後すぐに版を彫り、物資不足の中、インクが手に入るまでは油絵具で刷ったという。木版風の味わいのある荒い彫りが、過酷な状況と、それゆえに一層強く心を打ったであろう自然美の力を感じさせる。

原爆ドームの保存に向けた動きは1960年頃から本格化するが、戦後しばらくの間は、建物への出入り規制もなく、現在は立ち入れない内部空間を描きに入る画家もいた。

当時高校生だった入野忠芳は、傷ついた壁に肉迫するように、暗い色調を用いてその質感を丹念に書き出した。対照的に、大木茂の作品では、瓦礫を覆うほどに草が茂り始めたドームの内部を明るい光のもとに描写。「75年は草木も生えぬ」といわれた広島を思えば、緑の鮮やかさが目に染みる。

戦争や原爆の絵画表現には、抽象化や象徴化をはじめ、あの日の再現から離れた描写も含まれるが、その原点ともいえる〈ドームの絵画〉が持つ存在感や表現力に、改めて注目していただければと思う。

図版：朝井清「広島の夕焼」リノカット・紙(1945年、広島県立美術館所蔵)

・「戦争と美術、美術と平和④空気一変 ビキニの水爆実験」角田新(『中国新聞』2025年9月6日)

美術作品を通して戦前・戦後の広島を紹介している本展のなかで、第4室は戦後の表現をご紹介している。

戦後、広島でもさまざまな表現が生まれているが、その背景には、作家それぞれの戦争体験が大きく影響している。例えば被爆体験を持つ作家には、戦後しばらくの間は「戦争の悲惨さを描いても死んだ人は生き返らない」とか「美しいものを描くことで復興の支えになりたい」と、自らの体験を作品化しない作家が多かった。

その空気を一変させたのがビキニの水爆実験(1954年)だ。名井萬龜は「原爆があれほどの被害をもたらしたというのに、人類はさらに強力な兵器を生み出そうとするのか」と、人間の残虐性を告発する作品を描き始める。

名井以外にも多くの作家が同様に、次世代に伝えようと筆を執り始める。中には気持ちの整理に長い時間を必要とした作家もいた。

片岡脩は中学1年生の時、爆心地から約800mで被爆し、300人を超える同級生のほとんどを、そして父と兄まで失った。デザイナーとして独立して後も「被爆の惨状は紙や筆では描き切れない」と距離をとり続けたが、被爆40年の節目に命の残り時間を意識し、生き残った者の責任として自分の体験を次世代に伝えなければならないと思った。彼の描いたポスターは、直接的な表現を避けながら、戦争のない世界、平和な世界の実現を力強く訴える。

この度の展示では、作家ごとに異なるさまざまな体験と多様な表現をあわせてご紹介するよう努めた。少しでも多くの方に、作品を通して作家の体験に思いを馳せるきっかけとしていただけることを念願している。

図版：名井萬亀「六根清浄」(1968年、広島県立美術館所蔵)

・「戦争と美術、美術と平和⑤想像力揺さぶる原爆表現」神内有理(『毎日新聞』2025年9月13日)

原爆という人の想像をはるかに超えた惨禍を表現することの困難はいかばかりだろうか。小説家の大田洋子は、「先ず新しい描写の言葉を創らなくては、到底真実は描きだせなかった」(「屍の街」序)と原爆表現の難しさを語っている。

本展では、原爆を物語るためにさまざまに模索された表現が並ぶ。特に被爆体験を持つ画家たちは、深い悲しみ、怒りなどの精神的な苦悩に加え、身体的な苦痛、原爆症の不安を抱えながらこの困難に向かった。

平山郁夫が原爆を主題とした唯一の本画である「広島生変図」を描いたのは、被爆から34年後のことだった。煩惱を焼き尽くす不動明王の火炎と原爆を生み出した人間の業火のダブルイメージは、作者には珍しい両義性をはらんだ表現だろう。

本展の最後を飾る宮川啓五《太田川》は、高さ約90cm、幅約730cmの大作。18歳の時に被爆し、戦後は被爆者に対する差別を恐れて体験を秘した作者が、被爆50年を期に取り組んだもの。広島戦前・戦中、そして「あの日」と戦後を四季それぞれの風景として描き出す。流れる時間の中に原爆投下の情景を配することで、原爆により失われたものへの想像を促す。

多くの作家が原爆を表現する理由は様々だろう。亡くなられた方々への追悼と供養のため、記憶の継承のため、あるいは戦争への怒りと抗い…。共通しているのは、この惨劇を二度と繰り返してはならないという、平和への希求だろう。

だからこそ、彼らの作品には、時代や国境、人種や信条を越えて人々の想像力を揺さぶり、他者と苦しみを共有しようとする力が感じられるのではないだろうか。

図版：宮川啓五「太田川」紙本彩色(2000年、広島県立美術館所蔵)

『中国新聞』連載原稿（計4回）

・「戦争と美術、美術と平和①国策 芸術家の運命を左右」山下寿水（『中国新聞』2025年9月19日）

総力戦となった第2次世界大戦では、国家の政策が芸術家の運命を大きく左右した。例えばドイツでは、ナチスの政権掌握後、伝統から逸脱する前衛的な作品は、不健全な「退廃芸術」と見なされ、次々と芸術家が弾圧された。20世紀ドイツを代表する画家パウル・クレーは「世界が恐怖に満ちていればいるほど、芸術は抽象的になる」と述べた。その作品は狂気じみた子どもの殴り書きに過ぎないと揶揄され、教職を追放されただけでなく、国内の美術館が所蔵していた130点余りの作品が収蔵にふさわしくないと没収された。

1937年、前衛美術をおとしめる目的で開催された「退廃芸術展」では、彼の作品も15点展示された。そのうちの1点が「内なる光に照らされた聖人」である。戦争が人を、芸術をいかに翻弄してきたのか、本作などを通じて感じていただきたい。

図版：パウル・クレー「内なる光に照らされた聖人」1921年

・「戦争と美術、美術と平和②抑圧の違和感語る作品も」神内有理（『中国新聞』2025年9月20日）

全4章構成の第2章は広島を中心とした日本の戦前・戦後の美術作品が並ぶ。戦時色が強まり国策に沿った作品が作られた一方、抑圧への違和感を語る作品もあり、美術も社会的、政治的動向と無関係ではいられないことが分かる。

この章の一角に、現在の原爆ドームで展示されたことのある作品6点が並んでいる。原爆ドームは1915年に広島県物産陳列館（後に広島県立商品陳列所、広島県産業奨励館に改称）として建てられ、産業振興のための展示のほか、多くの美術展覧会が開催された。

丸木位里「池」は、36年に開催の芸州美術協会展出品作。友人の鬘光らの助言を受けたキュービズム的な多視点構図特徴。彼らは互いに刺激し合いながら創作に打ち込んだ。

同館を気に入った位里は、「なかなかええ会場だよ」と語った。同館は確かに、戦前の人々の暮らしの中に息づく美術館でもあった。

図版：丸木位里「池」1936年

・「戦争と美術、美術と平和③破壊の爪痕 閉塞感漂う」藤崎綾（『中国新聞』2025年9月23日）

現在、核兵器の廃絶や恒久平和を求めるシンボルとなっている原爆ドームは、戦争の悲惨さを物語る証人として、多くの画家により絵画化されてきた。ヒロシマ以後を生きる画家にとって、ドームを描くことは、特別な意味を持つともいえるだろう。

「原爆ドームの内壁」は、作者・入野忠芳が高校生時代に描いた画業最初期の作。現在は立ち入れない内部空間を描き、建物への出入り規制がなかった当時を伝えている。丹念に絵具を塗り重ねて表現した壁に残るのは、経年劣化による損耗とは異なる、破壊の荒々しい爪痕。画面中央と左の壁には開口部があるが、空と同様に暗い色で覆われ、先行きの見えない閉塞感や孤独感すら感じさせる。

ヒロシマを基点としつつも、あの日の再現から離れ、より普遍的な表現を目指した作者にとって、ドームに身を置き、対峙した本作は、創作の基軸と新たな方向性を手にした画業の始点であったのかもしれない。

図版：入野忠芳「原爆ドームの内壁」1956年



・「戦争と美術、美術と平和④原爆の記憶 絵馬に込め」角田新（『中国新聞』2025年9月24日）

3回にわたって紹介してきた夏の所蔵作品展だが、最後の展示室では多様に展開した戦後の美術を紹介する。その多様さは終戦によって自由な表現が可能になったからだとも言われるが、同時に各作家の戦争体験も大きく影響しているようだ。

例えば名井萬亀の「破滅」は絵馬として制作されたものだが、「復興の最中に破滅とはなんだ」と受け取りを拒否されたというエピソードが伝わる。作者は早くから技術や知識に頼らない原始的な表現を用い、やがて抽象表現を追求した。そのため原爆ドームを見たまま描いたこの作品は大変珍しい例だ。戦時中に長男を亡くし、画家としての名声を築いた戦前作も、そのほとんどを原爆で失った名井にとって、描画スタイルを変えてでも「破滅」という題の絵馬を奉納することに意味があったのだろう。

ぜひ本物を前に、それぞれの作家の思いと表現を直接感じて頂きたい。

図版：名井萬亀「破滅」1952年



出品目録

NO	作者	生没年	作品名	制作年	寸法 (cm)	材質	員数	出品歴・備考	展示替
【第1章】戦禍の西洋世界 (第1室)									
12	サルバドール・ダリ	1904-1989	ヴィーナスの夢	1939	243.8×487.6	油彩・画布・パネル	1面	ニューヨーク万国博覧会	
13	ルネ・マグリット	1898-1967	人間嫌いだち	1942	54.0×73.0	油彩・画布	1面		
14	ヘンリー・ムーア	1898-1986	ティルベリー・シェルター	1941	40.0×56.0	グワッシュ・クレヨン・板	1面		
15	ベン・シャーン	1898-1969	強制収容所	1944	61.0×61.0	テンペラ・板	1面		
16	金光松美	1922-1992	Mt. WHITNEY	1976	112.0×243.9	油彩・画布	1面		
17	イサム・ノグチ	1904-1988	追想	1944 (1983-84鑄造)	高125.7×62.2×22.8	ブロンズ	1点		
18	パウル・クレー	1879-1940	バウハウス版 新ヨーロッパ版画集 第1集 内なる光に照らされた聖人	1921	39.0×26.8	リトグラフ・紙	1面		
19	パブロ・ピカソ	1881-1973	フランコの夢と嘘 (Iの第1刷)	1937	31.7×42.2	エッチング・紙	1面		
20	パブロ・ピカソ		フランコの夢と嘘 (Iの第2刷)	1937	31.7×42.2	エッチング・シュガーアクアチント・紙	1面		
21	パブロ・ピカソ		フランコの夢と嘘 (IIの第1刷)	1937	31.7×42.2	エッチング・紙	1面		
22	パブロ・ピカソ		フランコの夢と嘘 (IIの第2刷)	1937	31.7×42.2	エッチング・シュガーアクアチント・紙	1面		
23	パブロ・ピカソ		フランコの夢と嘘 (IIの第3刷)	1937	31.7×42.2	エッチング・シュガーアクアチント・紙	1面		
24	パブロ・ピカソ		フランコの夢と嘘 (IIの第4刷)	1937	31.7×42.2	エッチング・シュガーアクアチント・紙	1面		
25	パブロ・ピカソ		フランコの夢と嘘 (IIの第5刷)	1937	31.7×42.2	エッチング・シュガーアクアチント・紙	1面		
26	ヘンリー・ムーア	1898-1986	弦のある形	1939	高28.8×10.7×5.7	ブロンズ、弦	1点		
27	バーバラ・ハップワース	1903-1975	ネスティング・ストーンズ	1937	高19×30.5×22.8	大理石	1点		
28	アリストイード・マイヨール	1861-1944	ウェルギリウスの農耕歌	1937-1944 (1950刊行)	33.7×25.3	木版・紙	72面のうち8面		
【第2章】戦前・戦中という時代 (第2章)									
29	南 薫造	1883-1950 (明治16-昭和25)	個展用ポスター下絵 (広島県産業奨励館)	1935 (昭和10)	63.0×48.2	水彩・紙	1枚	個人蔵	
30	南 薫造		絵ハガキ (広島県物産陳列館)		14.2×9.0	印刷・紙	1枚	個人蔵	
31	南 薫造		元安川		53.6×65.3	水彩・紙	1面		前期
32	小林 千古	1870-1911 (明治3-明治44)	広島夏の川	1903 (明治36)	32.8×50.0	パステル・紙	1面		後期
33	田中 万吉	1895-1945 (明治28-昭和20)	京橋川畔	1937 (昭和12)	53.6×65.3	油彩・画布	1面		
34	野田 信	1904-1952 (明治37-昭和27)	本川橋	1931 (昭和6)	33.3×45.4	油彩・板	1面		
35	檜山 武夫	1906-1932 (明治39-昭和7)	プラットホーム	1930 (昭和5)	60.0×73.0	油彩・画布	1面	第4回全関西展	
36	神田 周三	1894-1972 (明治27-昭和47)	里の花売りの母子	1931 (昭和6)	162.1×130.3	油彩・画布	1面	第12回帝展 入選作品	
37	岡部 繁夫	1912-1969 (明治45-昭和44)	卓上静物	1937 (昭和12)	73.0× 91.0	油彩・画布	1面	第23回広島県美術展	
38	渡辺 雲僊	1892-1972 (明治25-昭和47)	金鱗玉藻	1929 (昭和4)	180.0×96.0	絹本彩色	1幅	昭和美術展覧会	
39	田中 頼璋	1868-1940 (慶応2-昭和15)	漁樵問答図	1927 (昭和2)	178.5×95.0	絹本彩色	1幅	第12回広島県美術展覧会 (委員出品)カ	

NO	作者	生没年	作品名	制作年	寸法 (cm)	材質	員数	出品歴・備考	展示替
40	丸木 位里	1901-1995 (明治34-平成7)	池	1936 (昭和11)	150.0×205.0	紙本彩色	2曲1隻	第8回青龍社展	
41			第1回芸州美術協会展 関連資料	1936 (昭和11)	53.0×26.3	紙、印刷	1巻		
42			雑誌『実現』第179号	1935 (昭和10)	26.4×19.2	紙、印刷	1冊		
43	大村 廣陽	1891-1983 (明治24-昭和58)	南苑	1928 (昭和3)	212.0×158.0	絹本彩色	1面	第9回帝展	
44	福井 芳郎	1912-1974 (明治45-昭和49)	蓮	1928 (昭和3)	115.0×89.0	油彩・画布	1面	第9回帝展	
45	里見 勝蔵	1895-1981 (明治28-昭和56)	肖像(K夫人像)	1931 (昭和6)	100.0× 72.7	油彩・画布	1面	第1回独立展	
46	森谷 南人子	1889-1981 (明治22-昭和56)	初春閑村	1938 (昭和13)	116.0×195.0	紙本彩色	1面	第2回新文展	
47	六角 紫水	1867-1950 (慶応3-昭和25)	漆画爆撃行 (アルマイト応用研究作)	1940 (昭和15)	56.1×97.4	木・漆・アルマイト	1面	紀元二千六百年奉祝展	
48	児玉 希望	1898-1971 (明治31-昭和46)	黎明	1934 (昭和9)	191.0×178.0	絹本彩色	1面	第15回帝展	
49	名井 萬亀	1896-1976 (明治29-昭和51)	初空襲	1943 (昭和18)	61.0×80.5	油彩・画布	1面		
50	加藤 土師萌	1900-1968 (明治33-昭和43)	磁器香炉「瑞鳳」	1933 (昭和8)	高21.5 幅32.4	磁器・色絵	1合	第14回帝展	
51	六角 紫水	1867-1950 (慶応3-昭和25)	大空と洋海の驚異手箱	1934 (昭和9)	高15.3 30.2×23.3	木・漆・蒔絵・ 平文	1合	第15回帝展	
52	河面 冬山	1882-1955 (明治15-昭和30)	大楠公像乾漆額	1944-1945 (昭和19-20)	径31.2 厚2.0	乾漆	1面		
53	鈴木 保徳	1891-1974 (明治24-昭和49)	狼の檻を見る婦人たち	1936 (昭和11)	112.1×162.1	油彩・画布	1面	第6回独立展	
54	南 薫造	1883-1950 (明治16-昭和25)	台湾風景	1930 (昭和5)	40.8×31.8	油彩・板	1面		
55	岡田 謙三	1902-1982 (明治35-昭和57)	北市場	1942 (昭和17)	104.2× 87.0	油彩・画布	1面	第29回二科展	
56	井上 長三郎	1906-1995 (明治39-平成7)	屠殺場	1936 (昭和11)	203.0×270.0	油彩・画布	1面	第6回独立展	
57	松本 竣介	1912-1948 (明治45-昭和23)	車庫近く	1942 (昭和17)	33.4× 45.5	油彩・画布	1面	生誕100年 松本竣介展	
58	山路 商	1903-1944 (明治36-昭和19)	自画像	1942 (昭和17)	26.0×19.2	油彩・板	1面		
59	巖 光	1907-1946 (明治40-昭和21)	帽子をかむる自画像	1943 (昭和18)	60.0×50.0	油彩・画布	1面		
60	寺田 政明	1912-1989 (明治45-平成元)	月光によりて	1943 (昭和18)	31.8×40.9	油彩・板	1面	新人画会第 2回展	
61	巖 光	1907-1946 (明治40-昭和21)	窓辺の花(百合)	1944 (昭和19)	71.0×59.0	油彩・画布	1面		
【第3章】原爆の記憶 (第3章)									
62	朝井 清	1901-1968 (明治34-昭和43)	広島の夕焼(サインあり)	1945 (昭和20)	イメージ・サイズ30.5 ×44.8、シート・サイ ズ36.8×49.8	リノカット・紙	1面		前期
63	朝井 清		広島の夕焼(サインなし)	1945 (昭和20)	イメージ・サイズ30.4 ×44.8、シート・サイ ズ32.9×47.0	リノカット・紙	1面		後期
64	手島 守之輔	1914年-1945 (大正3-昭和20)	ゆかたの少女	1938 (昭和13)	133.0×93.0	油彩・画布	1面		
65	吉村 三郎	1914-1945 (大正3-昭和20)	満州風景	1932 (昭和7)	116.5×78.7	油彩・画布	1面		
66	岩岡 貞美	1913年-1945 (大正2-昭和20)	耕丘	1944 (昭和19)	119.5×71.0	油彩・画布	1面		
67	福井 芳郎	1912-1974 (明治45-昭和49)	ヒロシマ	1947-1948頃 (昭和22-23頃)	24.1× 33.4	油彩・画布	1面		

NO	作者	生没年	作品名	制作年	寸法 (cm)	材質	員数	出品歴・備考	展示替
68	神田 周三	1894-1972 (明治27-昭和47)	被爆後風景		56.6×84.0	油彩・紙	1面		
69	大木 茂	1899-1979 (明治32-昭和54)	壁C・ドームの中	1948 (昭和23)	130.5×97.0	油彩・画布	1面		
70	入野 忠芳	1939-2013 (昭和14-平成25)	原爆ドームの内壁	1956 (昭和31)	42.4×72.3	油彩・画布	1面		
71	平野 清	1915-1980 (大正4-昭和55)	塔(原爆ドーム)	1950 (昭和25)	85.5×57.7	油彩・画布	1面	第2回広島県美術展・呉市長賞	
72	古沢 岩美	1912-2000 (明治45-平成12)	死の誕生	1954 (昭和29)	97.0×193.9	油彩・画布	1面		
73	芥川 永	1915-1998 (大正4-平成10)	教師と子どもの碑 (石膏原型)	1970 (昭和45)	高240	石膏			
74	名井 萬亀	1896-1976 (明治29-昭和51)	地獄の港	1958 (昭和33)	50.1×65.2	油彩・画布	1面	第3回現代日本美術展	
75	増田 勉	1916-2007 (大正5-平成19)	死んだ鳩	1965 (昭和40)	97.0×162.1	油彩・画布	1面		
76	柿手 春三	1909-1993 (明治42-平成5)	火の中の渡り鳥	1961 (昭和36)	100.0×123.5	油彩・画布	1面	第25回自由美術展	
77	丸木 位里	1901-1995 (明治34-平成7)	竹林	1964 (昭和39)	各210.0×270.0	紙本墨画	2曲1双		
78	平山 郁夫	1930-2009 (昭和5-平成21)	広島生変図	1979 (昭和54)	171.0×364.0	紙本彩色	6曲1隻	第64回院展	
【第4章】戦争と美術、美術と平和 (第4章)									
79	名井 萬亀	1896-1976 (明治29-昭和51)	破滅	1952 (昭和27)	65.0×90.5	油彩・画布	1面		
80	金光 松美	1922-1992 (大正11-平成4)	AUGUST	1960 (昭和35)	182.8×182.8	油彩・画布	1面		
81	名柄 禎子	1931-2023 (昭和6年-令和5)	白の残映	1975 (昭和50)	193.9×260.6	油彩・画布	1面	第39回新制作展	
82	杉谷 富代	1922-2012 (大正11-平成24)	風の記憶	1980 (昭和55頃)	165.3×165.0	染	3曲1隻		
83	渡辺 博子	1938- (昭和13-)	紬織着物「蛍影」	2005 (平成17)	裾65.5 丈177.0	絹・紬・経緯緋	1領	第52回日本伝統工芸展	
84	名井 萬亀	1896-1976 (明治29-昭和51)	六根清浄	1968 (昭和43)	243.0×351.0	油彩・画布	1面		
85	片岡 脩	1932-1997 (昭和7-平成9)	LOVE PEACE	1985 (昭和60)	103×72.8	紙・シルクスクリーン	39面のうち1面		前期
86	片岡 脩		LOVE PEACE	1985 (昭和60)	103×72.8	紙・シルクスクリーン	39面のうち1面		前期
87	片岡 脩		LOVE PEACE	1985 (昭和60)	103×72.8	紙・シルクスクリーン	39面のうち1面		前期
88	片岡 脩		LOVE PEACE	1985 (昭和60)	72.8×103	紙・シルクスクリーン	39面のうち1面		後期
89	片岡 脩		LOVE PEACE	1985 (昭和60)	72.8×103	紙・シルクスクリーン	39面のうち1面		後期
90	片岡 脩		LOVE PEACE	1985 (昭和60)	72.8×103	紙・シルクスクリーン	39面のうち1面		後期
91	片岡 脩		LOVE PEACE	1985 (昭和60)	72.8×103	紙・シルクスクリーン	39面のうち1面		後期
92	片岡 脩		LOVE PEACE	1985 (昭和60)	72.8×103	紙・シルクスクリーン	39面のうち1面		後期
93	片岡 脩		LOVE PEACE	1985 (昭和60)	103×72.8	紙・シルクスクリーン	39面のうち1面		前期
94	宮川 啓五	1927-2023 (昭和2-令和5)	太田川	2000 (平成12)	92.4×733.4	紙本彩色	4面続		
95	殿敷 侃	1942-1992 (昭和17-平成4)	霊地		37.8×54.0	シルクスクリーン	1面		
96	菅井 汲	1919-1996 (大正8-平成8)	雲(試刷)	1961 (昭和36)	70.6×53.8	石版・紙	1面		

※No29、30以外は全て広島県立美術館蔵

広島県立美術館 研究紀要 第29号
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.29

発行日 令和8(2026)年3月19日
編集・発行 広島県立美術館
Hiroshima Prefectural Art Museum
〒730-0014 広島市中区上鞆町2-22
2-22 Kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN
Tel. 082-221-6246 Fax. 082-223-1444
印刷 株式会社 タカトープリントメディア

BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.29

Exhibition Record, Collection Exhibition: Summer Museum, 80 Years After the War - War and Art, 1
Art and Peace
JINNAI Yuri

Kimura Ihei, The Image Reborn: A Tentative Study on Contact Prints for 'LIVING HIROSHIMA' 25
YAMASHITA Hisana

2026

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN